芸　術　（音　楽）

1　研究のテーマ

(1) 研究テーマ

組織的な授業改善の推進～新学習指導要領の実施を踏まえた音楽科における主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の実践～

(2) 研究のねらい

近年県内の高校で取り入れる機会の多いヴァイオリンを扱った題材を通して、上記のテーマを踏まえた題材計画と、その効果的な評価方法についての研究を行った。

2　実践事例

(1)題材指導計画

ア　科目名：音楽Ⅰ

イ　題材名：「ヴァイオリンの音色を探求し、その響きを味わおう！」

ウ　題材の目標：

・曲想とヴァイオリンの音色や奏法との関わり及び様々な表現形態による器楽表現の特徴について理解するとともに、創意工夫を生かした器楽表現に必要な奏法、身体の使い方などの技能及び他者との調和を意識して演奏する技能を身に付ける。

・音楽を形づくっている要素(音色・テクスチュア)を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて表現意図を持つ。

・ヴァイオリンの音色や奏法との関わりに関心を持ち、主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組むとともに、感性を高め、音楽文化に親しむ。

エ　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知 曲想とヴァイオリンの音色や奏法との関わり及び様々な表現形態による器楽表現の特徴について理解している。 技 創意工夫を生かした器楽表現に必要な奏法、身体の使い方などの技能及び他者との調和を意識して演奏する技能を身につけ、器楽で表している。	・音楽を形づくっている要素(音色、テクスチュア)を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて表現の意図をもっている。	・ヴァイオリンの音色や奏法との関わりに関心を持ち、主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組もうとしている。

本題材で扱う学習指導要領の内容

音楽Ⅰ　A表現　(2)器楽　器楽に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫すること。

イ　次の(ｱ)から(ｳ)までについて理解すること。

(ｲ)　曲想と楽器の音色や奏法との関わり

(ｳ)　様々な表現形態による器楽表現の特徴

ウ　創意工夫を生かした器楽表現をするために必要な，次の(ｱ)から(ｳ)までの技能を身に付けること。

(ｱ) 曲にふさわしい奏法，身体の使い方などの技能
(ｲ) 他者との調和を意識して演奏する技能

［共通事項］（１）(本題材の学習において、生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：【音色、テクスチュア】)

オ　題材の指導と評価の計画　○「記録に残す評価」　●「指導に生かす評価」

次	時	◆ねらい　○学習内容　・学習活動	知技	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1	＊毎時の冒頭に「♪カノン」を流し、曲想のイメージをもたせる。				
		◆「ヴァイオリンの良い音」について考える。				
		○ヴァイオリンの音色を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受する。 ・基本的な楽器の準備や扱い方を学習し、自分なりに音を出し、その音色について感じたことをワークシート①に記入する。 ・弓の持ち方、構え方、弓の動かし方などの基本奏法を学び、開放弦を弾く。 ・音色を意識しながら、範奏を鑑賞する。 ・それぞれがもっているヴァイオリンのイメージ(構え方、弾き方等)で音を出し、範奏との音色の違いをワークシート②に記入する。 ・片づけの方法を知る。			●	態〈観察〉〈ワークシート〉 ※技能に関して、自分の思いや意図を音楽で表現するためには、ある程度の技能が必要不可欠である。その技能は「学習を成立させるための技能」となるため、毎時間丁寧な指導を行う。
	2	＊演奏しながら気が付いたことは、ワークシートＰ２「すてきな演奏へのアイデアメモ」に記入するよう、毎時間伝える。				
		◆ボウイングと良い音の関わりについて考える。				
		○音色や移弦を意識しながらボウイングについて考える。 ・本時のテーマに合った範奏を鑑賞する。 ・弓を使う量による音色の違いを感受する。 ○移弦を体験し、何を意識して弓を動かすか考える。 ・「♪エトピリカ」に合わせながらＤ線、Ａ線を弾く。 ・Ｇ線→Ｄ線、Ａ線→Ｅ線がどうすればスムーズにつなげることができるか、個人で音を出しながら考える。 ・上記の内容についてグループで意見を交換しながら新たに気が付いたことを、ワークシート③に追記する。	知 ●		●	知イ(ｲ)〈ワークシート〉
2	3	◆美しい音色で演奏するために必要なことについて考える①。				

		○ある程度の音高を意識して左手を押さえる技能を身に付ける。 ・「♪カノン」Ⅱパートを全員で演奏する。 ・Ⅰパートの運指を確認し弓を使って練習する。 ・ピチカートが効果的に使われている楽曲を鑑賞する。 ・Ⅰパートをピチカートで練習する。 ・グループで聴きあい、左手の運指に関して気が付いたことをワークシート④に記入する。 ・クラス全体で合奏(ピチカートのみ)を行い、楽曲の見通しをもつ。 ・Ⅰパートを弓で演奏する。			●	※技能において「努力を要する」状況Ｃと判断されそうな生徒が生まれないよう、ワークシート④の設問(こんなことに困っています)を設けた。授業後にチエックをし、何か記載があれば、個別に声をかけ、フォローアップを行う。
	4	◆美しい音色で演奏するために必要なことについて考える②。				
		○「♪カノン」のⅠパートとⅡパートが、滑らかに演奏できるよう、個人・グループで試行錯誤する。 ・「♪カノン」の範奏を聴き、楽曲の雰囲気や味わいについてイメージを深める。 ・ボウイングと運指を意識しながら、「♪カノン」を３パートで演奏する。 ・合奏を繰り返し、美しい音色で演奏するために必要なことについて気が付いたことをワークシート⑤(マインドマップ)に記入する。 ・グループで三重奏をする際に、大事にしたいことをグループで考える。 ・意識したい音楽の要素を考えながら、弦楽合奏を鑑賞する。	技 ●	●	●	技イ(ｲ)〈観察〉 思ア〈ワークシート⑤マインドマップ〉
3	5	◆「♪カノン」をどのように演奏するかについて考える①。				
		○ヴァイオリンの音色や奏法を生かして、「♪カノン」をアンサンブルで演奏するために必要な奏法の工夫について考える。 ・カノン形式について知る 。 ・形式を知った上で、「♪カノン」をどのように演奏したらよいか、音を出しながら話し合い、ワークシート⑤(マインドマップ)に記入する。 ・次回の公開リハーサルに向けて、グループとして意識したいポイントについて、グループで考える。		●	●	
	6	◆「♪カノン」をどのように演奏するかについて考える②。				

	公開研究授業	○グループ演奏の聴き所について考え、表現できるようになる。 ・グループで試行錯誤を繰り返す。その中で新たな表現意図が生まれた場合は、ワークシート⑤(マインドマップ)に追記する。 ・新たな気付きを得るために、公開リハーサルを行う。		○	●	思〈ワークシート⑤マインドマップ下「私たちのグループの演奏の聴きどころはここ」〉
4	7	◆「自分が思う良い音を出すために大切だと思うこと」「アンサンブルの魅力」について考える。				
		○今回の題材を通して、自身が学んだことについて振り返る。 ・１グループずつ演奏発表を行う。 ・題材の振り返りをワークシートに記入する。	知 ○ 技 ○		○	態〈観察〉〈ワークシート⑤マインドマップ〉 知イ(ｳ)〈ワークシート「最後に…」の欄〉 技ウ(ｱ)(ｲ)〈発表観察〉

研究実施校：神奈川県立逗葉高等学校(全日制)
実　施　日：令和４年11月15日(火)
授業担当者：濱田　愛深　教諭

(2) 主体的・対話的で深い学びの視点に基づく指導と評価のポイント

研究を行うにあたり、本題材における「主体的・対話的で深い学び」について、以下のような具体的な生徒の姿を推進委員会でイメージした(本来はそれぞれ切り離して考えることはしないが、検証のため下記のように整理をした)。

・主体的な学び…ヴァイオリンの音色やアンサンブルに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組んでいる

・対話的な学び…グループ内での対話等を通じて自己の考えを広げ深めている

・深い学び　　…音楽的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けたり、問題を見い出したりして、より良い音色やアンサンブル方法について考えている

これらの視点をおさえた指導と評価について、ワークシートによる学習の方向付けが有用ではないか、と推進委員会では考え、その具体について会議を重ねた。その後、「初めて触れるヴァイオリンの音色やより良いアンサンブルを探求していく」という今回の題材には、マインドマップが適しているという結論に至り、完成したワークシートをもとに研究授業を行い、個人の取組やグループ活動の様子、また題材終了後の生徒のワークシートの記述から、検証を行った。

【指導の検証】

推進委員会では、上記の視点を意識し、マインドマップ(図１)を作成した。ゴール(ねらい)を「すて

きな演奏」とし、題材の成立基盤である本題材の「音楽を形づくっている要素」である音色・テクスチュアをそこに向かう二つの流れのように視覚化することで、学習の方向付けを行った。題材終了後、ワークシートには概ね次のような記述を見ることができた(図１)。

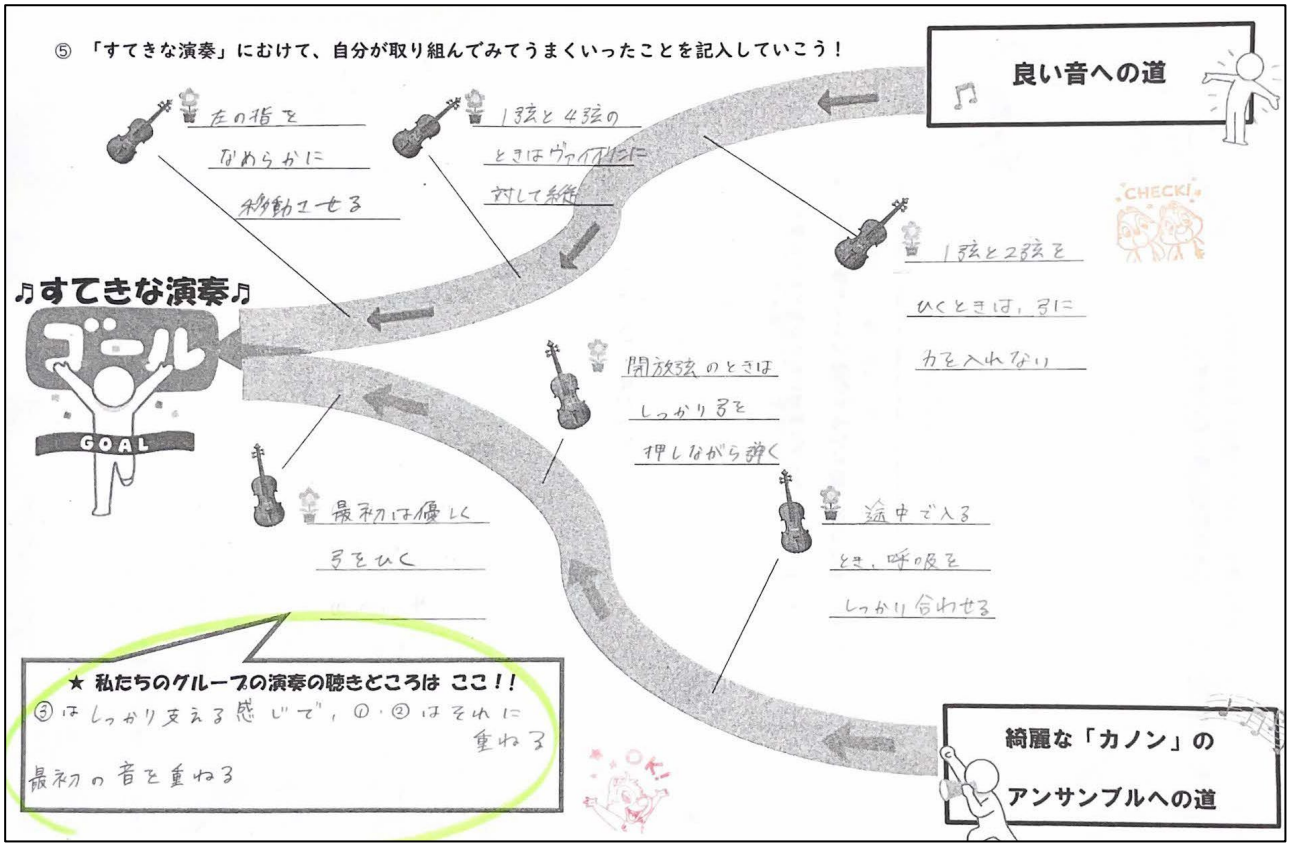


図１　（ワークシート⑤マインドマップ）

この記述からわかるように、音楽的な見方・考え方の支えとなる音色・テクスチュアを意識しながら、「すてきな演奏」に向かっていく思考の流れや必要な取組について、生徒自身が記入しながら把握することができた、と判断できる。

グループワークでの発言や個人練習の様子といった取組からも、範奏と自身の音色やアンサンブル力を比較して得た「すてきな演奏」へのイメージ(ワークシート①)に向かって、自身の得た知識(ワークシート③)を生かしながら、見通しをもった学習を行っている、と十分に判断できる状況が確認できた。

さらには、意識すべき音楽的な要素がマインドマップに明示（良い音への道、アンサンブルへの道）されているため、それらの要素を学びの支えとし、グループワークが停滞することなく仲間と音を出しながら試行錯誤していた。マインドマップによる題材の方向付けが、学習内容を焦点化し、本題材における学びの深まりを生んだ、と言える結果となった。

グループワークの様子

【評価の検証】

今回のマインドマップは、その記述の内容を「主体的に学習に取り組む態度」における「自らの学習を調整しようとする側面」として見取ることができるのではないかと考え、発問を「すてきな演奏に向けて、自分が取り組んでみてうまくいったことを記入していこう」とした。その結果、生徒の記述は図１のような記述が大半を占めた。生徒は授業で得た知識や技能を活用して、今できることを記述して

おり、目的に向かう意思的な側面として見ることができると、推進委員では判断をした。
　また、同側面を見取るための設問として「♪すてきな演奏へのアイデアメモ」(ワークシートＰ２を参考)を設けたが、生徒の記述は極端に少ない結果となった。これらは「メモや下書きといった内容をワークシートに書きこむ習慣がない」「楽器を持っているため、メモが取りづらい」ことが原因として考えられる。生徒の試行錯誤を見取るためには必要な項目であるため、「枠を葉っぱ型にして、木を実らせよう」といった書きたくなる枠組みの工夫、楽器を持ったまま、アイデアを端末の音声メモに残す、といった今後に向けた対策が必要である。
　対話的な学びに関しては、グループ活動の際には「そう弾けばいいんだね！」といった学び合いや新たな発見の言葉を多々聞くことがあったが、ワークシート内の【新たな発見】の欄には記述が少ない状況であった。他者の意見を見聞きすることで、広まり深まった自身の考えをマインドマップに書き込んでいることも十分に考えられるが、その見取り方には課題が残った。

※「主体的に学習に取り組む態度」のもう一つの側面である「粘り強い取組を行おうとする側面」については、生徒一人ひとりのヴァイオリンの取組を観察し、二つの側面を補完的に補いながら評価を行った。

(3)まとめ
　今回主体的・対話的で深い学びの視点に基づく学習過程の研究の中で、重要なキーワードとして、以下の四つが挙げられた。

・「学習を成立させるための技能」
　生徒が実感を伴う知識を得て、思考・判断・表現を行うためには最低限の技術を習得する必要がある。そのためには、適切な題材の設定を行い、題材の前半で指導に生かす評価として、生徒の学習状況を見取りながら、基本的な奏法や歌唱の技能を身に付け、必要な資質・能力の育成につなげられるようにする必要がある。ヴァイオリンの学習においては、「楽器の構え方」「弓の持ち方」「楽譜の読み取り方」「基本的なボウイングやフィンガリング」などがそれにあたる。今回の研究では、題材計画にもあるように、題材の前半ではそれらについて丁寧に指導するとともに、技能について困っていることが記入できる欄(ワークシート④)を設けるなどして、フォローアップを充実させた。また、楽曲の中で持続音やフィンガリングについて段階的に学習できるよう、編曲も行っている。

・「題材を貫く問い」
　「単元(音楽では題材)を貫く問い」を生徒に提示することにより、複数時わたる授業の学びに一貫性を持たせることができると考えた。今回ヴァイオリンで「パッヘルベルのカノン」を取り上げるにあたり、「良い音とは何か」を「題材を貫く問い」として中心に据え、題材計画の検討を行い、毎回の授業において、「題材を貫く問い」に関連させた具体的な問いを設定することにより、訓練のようにヴァイオリンを練習する活動のみに陥らないよう留意した。その中で、他者と考える、他者の音楽を聴くことを通して、自身の考えや知識を広げるという学校教育ならではのメリットを生かした授業を計画した。

・「マインドマップの活用」
　本題材の中で、ワークシートにマインドマップを取り入れ、「題材を貫く問い」に対し、生徒が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つ育成を目指す資質・能力を育めるようにした。今回はフィッシュボーン型をもとにしたマインドマップを作成し、「すてきな演奏」をゴールとし、「良い音を出すためにどうすればよいか」「良いアンサンブルをするためにどうすればよいか」という２つの視点から、目標に向かうための手立てを生徒自身が考え、ワークシート上に記入させた。今後更にマインドマップを有効に活用するためには、毎回の題材で生徒が自分の考えを記入する活動を習慣化することや、目的によって「ロジックツリー型」や、「放射状マインドマップ」など型式を使い分けることなどが考えられる。

また、マインドマップは、見通しや振り返りシートに代替するツールとしての可能性をもっている。毎回の学習の中で、新しい発見や次回への課題を自分で見付け、気が付いたことを書き足していき、最後のまとめとして「良い音とは～のようなことであると思った」「ヴァイオリン以外にも同じことが生かせると思った」など、ヴァイオリンで得た具体的な学びを一般化し、自分なりのゴールを導き出すことができれば、「主体的に学習に取り組む態度」として評価することが可能であると考えられる。

・「実感を伴う知識」

授業中に得た知識を、いつでも視覚的に確認できるよう、ワークシート③のような記入欄を設けた。また、アンサンブル発表に向けた公開リハーサルを行った中で、授業者は生徒の演奏に対し「開放弦の音がよく響いていた」など、良かったことをコメントするだけでなく、「この音が鳴るよう実際に全員で弾いてみよう」と、音を使いその場でフィードバックを行うことで、生徒が「実感を伴う知識」を身に付けることができる場面を作り出した。生徒たちはヴァイオリンの学習を通して、正しい奏法や楽器各部の名称を覚えることだけにとどまらず、楽器の音色と奏法との関わりを体感しながら理解していくことができた。

ここまで述べてきた重要なキーワードは、生徒の資質・能力の育成を念頭においた題材計画を考える中で実際に使われた言葉であるとともに、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」の要点をおさえるためのポイントでもある。本研究では特にマインドマップに焦点を当てたが、各学校で本研究を活用するためには、題材の内容や各所属校の実態に合わせ、他のキーワードも相互に関連させながら、生徒一人ひとりの学習が充実するように努める必要がある。その際は、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説音楽編」にあるように、「授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、生徒に題材を通して育む資質・能力の育成に向けた授業改善を進める」ことに留意をして、今後も研究を続けていきたい。

・ワークシート/使用楽譜

ヴァイオリンの音色を探求し、その響きを味わおう！

ヴァイオリンの【良い音】とは？
～自分の持っているイメージでヴァイオリンを弾いてみよう！～

① 初めに出したヴァイオリンはどんな音色がしたかな？

Q. 範奏の音色はどんな音色だった？	Q. 自分の音色とはココが違う!!

・正しい奏法を意識して弾こう！
② 初めに出した音色と、音にはどんな変化が生まれたかな？

この先きっと役に立つ！

♪ すてきな演奏へのアイディアメモ ♪

・ボウイングと良い音との関わりは？
③ さまざまな弓の使い方を試して「良い音」を探っていこう！

キーワード・・・角度・スピード・重さ・圧・幅・広さ

弓の「〇〇」を「 ▲▲▲ 」する	音はどう変わった？
弓の「　　」を「　　」する	
弓の「　　」を「　　」する	
弓の「　　」を「　　」する	
弓の「　　」を「　　」する	
弓の「　　」を「　　」する	

・エトピリカに合わせて弾いてみよう！
『どうしたら２つの音をスムーズにつなげることができるかな？』

【個人の考え】	【グループで出た意見・新たな発見】

・さらにステップアップ！　左手を押さえながらの演奏にチャレンジ！

④ 左手の動きが追加されて・・・**こんなことに困っています**

⑤ 「すてきな演奏」にむけて、自分が取り組んでみてうまくいった事を記入しよう！

→「すてきな演奏への道！」マインドマップに気付いたことをどんどん書き込んでいこう！

・ 各グループの演奏を聴いて

	・「素敵だな」と思ったところをコメント ・

↓題材の最後に「アンサンブルの魅力や、今回学んだことで次回に生かしたいことについて書きましょう」と口頭で指示

最後に・・・

⑤ 「すてきな演奏」にむけて、自分が取り組んでみてうまくいったことを記入していこう！

良い音への道

♫すてきな演奏♫

ゴール

GOAL

★ 私たちのグループの演奏の聴きどころは ここ！！

綺麗な「カノン」の

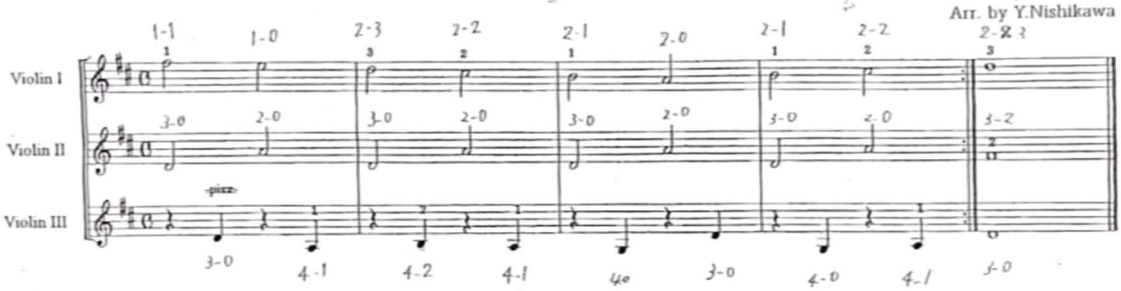
アンサンブルへの道

Score

Canon

For Three Violins

Music by Pachelbel
Arr. by Y.Nishikawa



グループで
・はじめに入る人 ① … I → II → III → I → II → 3-2 終
・2番目に入る人 ② … I → II → III → I → 2-2 3
・3番目に入る人 ③ … I → II → III → 3-0

©Y.Nishikawa